

成田市大袋塔之下遺跡

— TV中継放送局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成7年3月

新東京国際空港公団
財団法人 千葉県文化財センター

なりたし おおぶくろとうのした
成田市大袋塔之下遺跡

—TV中継放送局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成7年3月

新東京国際空港公団

財団法人 千葉県文化財センター

序 文

成田市は千葉県の北東部に位置し、豊かな自然が残された地域で、原始・古代の人々の生活の跡である遺跡も数多く残されています。また成田市ほか3町にまたがって建設された新東京国際空港によって著しく変貌を遂げつつある地域でもあります。昭和53年の開港以来、旅客数及び貨物取扱量は増加の一途をたどり、その重要性はますます大きくなっています。新東京国際空港公団では開港後も様々な関連施設の整備や周辺対策事業を行っています。その一環として、成田市大袋塔之下地先にTV中継放送局の建設が計画されました。

このため千葉県教育委員会では、予定地内に所在する遺跡の取扱いについて新東京国際空港公団と協議した結果、記録保存の措置を講ずることで協議が整い、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することになりました。

発掘調査の結果、古墳時代後期や奈良・平安時代の住居跡群が検出され、大規模な集落跡の一部であることが明らかとなりました。

このたび整理作業が終了し、その成果を「成田市大袋塔之下遺跡」として刊行するはこびとなりました。本書が学術的な資料としてはもとより、多くの方々が郷土を知るための資料として広く活用されることを願っています。

終わりに、発掘調査から報告書の刊行に至るまで種々御指導、御協力いただいた千葉県教育委員会、新東京国際空港公団及び地元関係諸機関にお礼申し上げるとともに、発掘調査や整理作業に協力された調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成7年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 奥 山 浩

凡　　例

1. 本書は千葉県成田市大袋字塔之下223-6ほかに所在する大袋塔之下遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、空港関連事業に伴う事前調査として、新東京国際空港公団の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 調査で使用した遺跡のコード番号は211-053である。
4. 発掘調査は、平成2年11月1日から12月26日にかけて実施した。現地の調査は主任技師麻生正信が担当した。
5. 整理作業は平成6年8月1日から9月30日にかけて実施し、空港分室長小久實隆史が担当した。
6. 本書は、調査研究部長西山太郎及び成田調査事務所長矢戸三男の指導と助言のもとに小久實隆史が編集を行った。執筆については、石器を主任技師新田浩三が行い、それ以外を小久實が行った。なお、縄文土器については主任技師宮城孝之、陶磁器については芝山分室長鳴田浩司・主任技師井上哲朗の協力を受けた。
7. 本書に使用した航空写真は、京葉測量株式会社の撮影によるものを使用した。
8. 本書に使用した図面の方位はすべて座標北である。
9. 本書に収録した遺物及び記録類は当文化財センターで保管している。
10. 本書に使用した地形図のうち、第1図は成田市発行の1:2,500地形図、第4図は国土地理院発行の1:25,000地形図「成田」をそれぞれ使用した。
11. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の諸機関から御指導・御協力をいただきました。記して感謝いたします。

千葉県教育庁生涯学習部文化課、成田市教育委員会、新東京国際空港公団

本文目次

第1章 序説	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の方法と経過	1
3. 遺跡の概要	4
(1) 遺跡の立地	4
(2) 周辺の主要遺跡	4
(3) 基本層序	6
第2章 遺構と遺物	7
1. 住居跡	7
2. 掘立柱建物跡	17
3. 溝・柵列	18
4. 土坑	20
5. その他の遺物	26
6. 遺構外出土土器	27
7. 石器	29
第3章 まとめ	34
1. 古墳時代以前	34
2. 奈良・平安時代	34
3. 中世以降	35

挿図目次

第1図 周辺地形図	2
第2図 グリッド分割図	3
第3図 確認調査状況図	3
第4図 大袋塔之下遺跡と周辺の主要遺跡	5
第5図 基本層序	6
第6図 S I 01	7
第7図 S I 02	8
第8図 S I 03	9

第9図	S I 04	10
第10図	S I 05	12
第11図	S I 06・07	14
第12図	S I 08・09・10	16
第13図	S B01	17
第14図	S B02	18
第15図	S D01・02	19
第16図	土坑（1）	21
第17図	土坑（2）	23
第18図	土坑（3）	25
第19図	その他の遺物	26
第20図	遺構外出土土器（1）	27
第21図	遺構外出土土器（2）	28
第22図	石器（1）	30
第23図	石器（2）	31
第24図	石器（3）	32
第25図	石器（4）	33
第26図	遺構配置図	37

図版目次

- 図版 1 遺跡周辺航空写真
- 図版 2 S I 01全景、S I 02全景、S I 02カマド
- 図版 3 S I 03全景、S I 03カマド、S I 04全景
- 図版 4 S I 05全景、S I 03・08・09・10全景、S I 04・06・07全景
- 図版 5 S B02全景、S D01全景、S D02全景
- 図版 6 S K01全景、S K03全景、S K04・05全景、S K09・10全景、S K11全景、S K12全景
- 図版 7 S K15・16全景、S K21全景、S K23全景、S K26全景、S K24全景、S K24馬齒出土状況
- 図版 8 遺構内出土土器
- 図版 9 出土石器

第1章 序 説

1. 調査に至る経緯

千葉県の北東部に位置する成田市周辺では、新東京国際空港の建設に伴う様々な周辺対策事業が行われている。その一環として新東京国際空港公団では、空港周辺地域のTV受信状況を改善するため成田市大袋塔之下地先にTV中継放送局の建設を計画した。この事業の予定地は周辺に埋蔵文化財が数多く所在する地域であり、また昭和59年に東京電力の送電線鉄塔建設に伴う発掘調査によって集落遺跡の存在が確認された遺跡内でもあった。このため、TV中継放送局の建設に先立ち、千葉県教育委員会では新東京国際空港公団と協議を重ねた。その結果、予定地内に所在する埋蔵文化財については記録保存の措置がとられることになり、財團法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することになった。

2. 調査の方法と経過

調査の基本的な方法としては、事業範囲約5,800m²のうち施設が建設される部分1,600m²を調査の対象とし、まず確認調査を実施し、その結果に基づいて本調査を行うというものである。

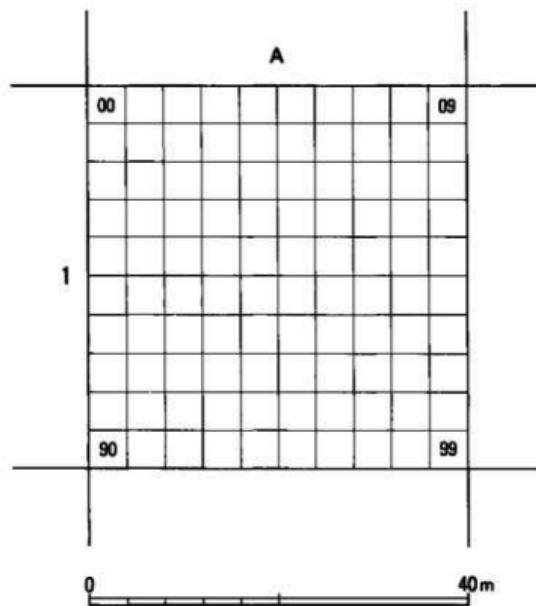
調査区内のグリッド設定は、事業範囲を公共座標に合わせて40m×40mの方眼網で覆い、大グリッドを設定した。大グリッドの呼称は、東西方向を西からA～D、南北方向を北から1～4にして、A 1～D 4 グリッドとした。大グリッドの中をさらに4m×4mの小グリッド100個に分割した。小グリッドは北西隅を起点に00～99の番号をふり、大グリッドと組み合わせてA1-00、C3-99のように呼称した。

発掘調査は平成2年11月1日から開始した。上層の確認調査は、遺構・遺物の分布状況・密度等を把握するため調査対象地に対象面積の10%のトレンチ・グリッドを設定し、11月中旬まで行った。その結果調査対象地全域に遺構が分布していることが明らかとなり、全域が本調査の対象となった。本調査は重機によって表土層を除去した後遺構の精査を行った。

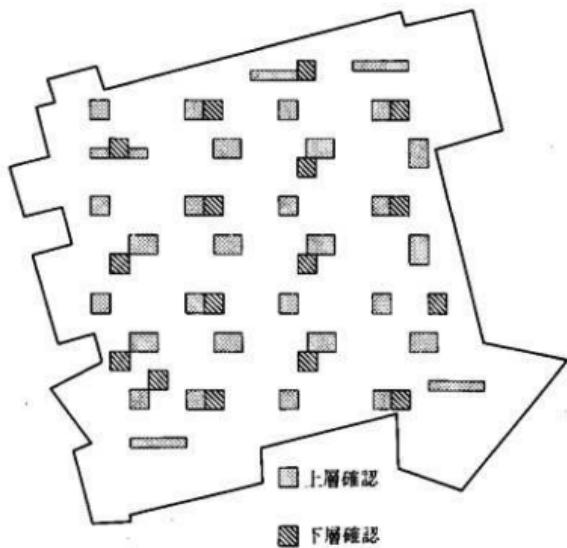
下層の確認調査は、上層の遺構精査と平行して、遺構の検出されない部分から順次対象面積の4%のグリッドを設定し、12月上旬～12月中旬にかけて行った。その結果、遺構・遺物は検出されず、本調査へは移行しなかった。

その後調査対象地の縁辺部分に検出された遺構について、完掘をめざして調査対象地外へ拡張を行った。しかし南東隅に検出された住居跡群については、事業範囲外に延びているため完掘できなかった。一部拡張の結果、最終的な調査面積は約2,000m²となった。12月26日にすべての調査を終了した。





第2図 グリッド分割図



第3図 確認調査状況図

3. 遺跡の概要

(1) 遺跡の立地

大袋塔之下遺跡は、JR成田駅から西へ約3kmの成田市大袋字塔之下223-6ほかに所在する。千葉県の北部に位置する成田市は広大な下総台地によってその大半が占められている。この台地は、成田市域では東側の空港予定地周辺ではあまり開析を受けていないため平坦面が広く残っているが、西側の印旛沼周辺では樹枝状に多くの谷が開析を受けているため、細長い谷底に低地が広がるという対照的な方をみせている。

本遺跡は印旛沼水系に属しており、印旛沼に注ぐ江川によって開析された支谷に臨む台地上に立地している。遺跡をのせる台地は、西側と南側にも小支谷が入り込んでいるため複雑な地形となり三角形状を呈し、その先端部に遺跡が所在する。遺跡の標高は約28m、沖積低地との比高差約20mを測り、斜面（特に東側）はかなり急峻なものとなっている。今回の調査区は遺跡の東側部分を対象として行われたもので、調査対象地は南東から北西に向かって緩やかに傾斜している。

(2) 周辺的主要遺跡

大袋塔之下遺跡（1）の所在する印旛沼水系には数多くの遺跡が分布しており、古くから人間活動の舞台としての条件が整っていたことがうかがえる。周辺の主な遺跡を時代を追ってみてみる。

旧石器時代の遺跡は、その性格上大規模な発掘調査によって初めて明らかになることが多いため、大規模な発掘調査例が少ない当遺跡周辺ではほとんど知られた遺跡はない。わずかに大袋金堀遺跡でナイフ形石器の出土が知られ、江川をはさんで対岸に位置する成田ニュータウン内の10遺跡で遺物の出土が知られるのみである。ただ最近では当遺跡の南東に位置する公津東遺跡群において大規模な発掘調査に伴い、旧石器時代の遺跡が調査されつつある。

縄文時代の遺跡としては、成田ニュータウン内で早期・前期の集落が確認されているだけで、遺物の出土が報告されている遺跡がいくつかあるものの、その実態は旧石器時代と同様に明らかでない。わずかに北西に所在する後・晩期の台方花輪貝塚（8）が知られるのみである。

弥生時代の遺跡は成田市内でも数少なく、当遺跡周辺ではほとんど確認されていない。

古墳時代になると遺跡数が増加する。まず古墳では、成田ニュータウン内で調査された天王・船塚古墳群、本遺跡の北西に位置し、かつて変形神獣鏡が出土した丸塚を含む台方・下方古墳群（7）、南に位置し、馬形埴輪が採集された宗吾・飯仲古墳群（5）などがある。また印旛沼に向かって延びる細長い台地上には、五郎台古墳群（9）や北須賀・勝福寺裏古墳群（11）がある。集落遺跡では成田ニュータウン内の遺跡を初めとして、特に後期に多くの遺跡が周辺に存在する。本遺跡も昭和59年に一部発掘調査が実施され、後期の住居跡が検出されている。ま



た南に位置する大袋台畠遺跡（2）でも後期の住居跡が検出されている。さらに、南西側の宗吾西鷺山遺跡（3）や下方内野南遺跡（4）では古墳時代～奈良・平安時代にかけての大集落が検出されている。その他成田ニュータウン内や公津東遺跡群で後期の集落が検出されている。

奈良時代～平安時代についても古墳時代同様に遺跡数が多い。成田ニュータウン内や公津東遺跡群での大規模な集落の検出のほか、本遺跡や大袋台畠遺跡で住居跡が検出されている。

中世城郭では、印旛沼に向かって延びる台地上に鷺山（公津）城跡（6）や柳波山砦跡（10）があり、遺構も良く残っている。

(3) 基本層序

大袋塔之下遺跡の層序は第5図のとおりである。

調査対象地は南東から北西に向かって緩やかに傾斜している。台地平坦面に近く、比較的遺存状態が良い調査対象地の中央やや東よりのC2-57グリッドの東壁断面を基本層序とした。

I層（黒褐色土）表土層。

III層（黄褐色ローム）いわゆるソフトローム層。

IV～V層（黄褐色ローム）分層は困難であった。

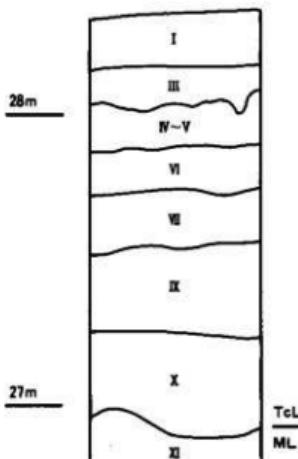
VI層（明黄褐色ローム）AT（始良丹沢バミス）を含む層。

VII層（黄褐色ローム）第2黒色帯の上部に相当する。

IX層（黄褐色ローム）第2黒色帯に相当する。

X層（暗茶褐色ローム）立川ローム層最下層。

XI層（褐色ローム）武藏野ローム層最上層。



第5図 基本層序

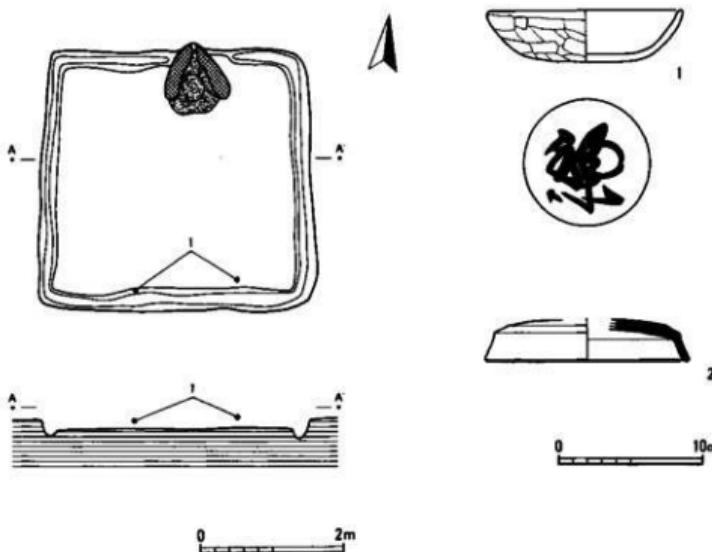
第2章 遺構と遺物

1. 住居跡

S I 01 (第6図、図版2)

調査区の南西、B2-90・91グリッド等に検出された。南側約5mにS I 02が位置する。ゴボウ耕作時のトレッチャの痕跡が縦横に認められ、床面を掘り抜きハードローム層にまで及んでいる。なお、同様の損壊が今回発掘されたすべての住居跡で認められる。

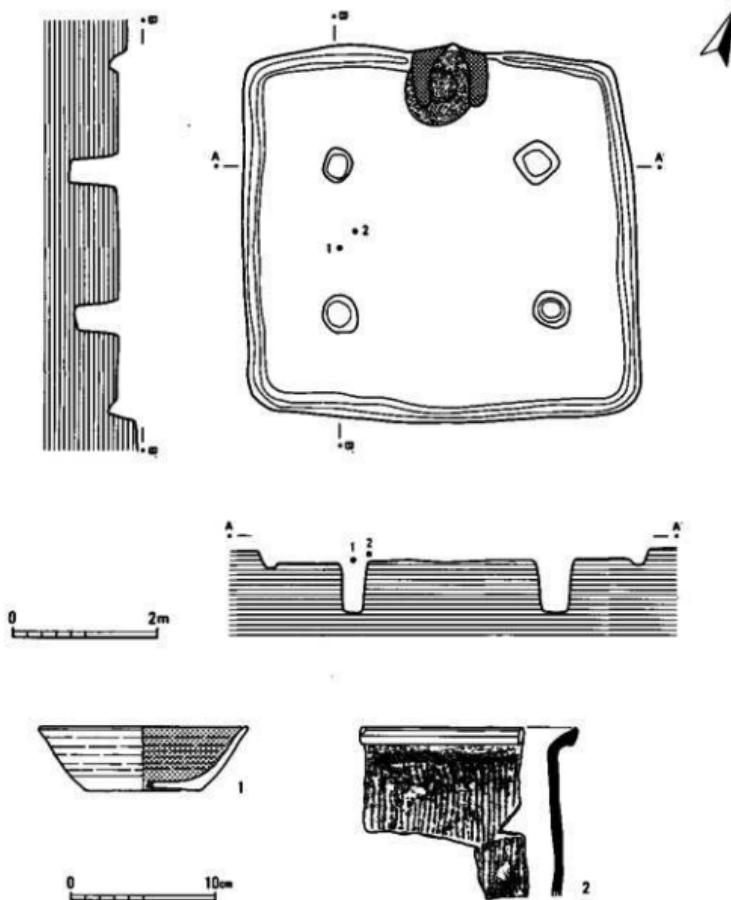
平面形はほぼ正方形を呈し、規模は東西3.8×南北3.6mを測る。検出面からの掘り込みの深さは深いところで20cm、平均して15cm前後を測る。壁溝はカマドの部分を除いて全周し、幅約10~20cm、深さ約10~15cmを測る。ピットは検出されなかった。床面は凹凸に富み、軟弱である。覆土はロームブロックを含む暗褐色土の單一層であった。カマドは北壁の中央よりやや東に寄った位置に構築されている。耕作時の擾乱のため遺存状態が悪いが、両袖と火床部の焼土が確認できた。カマド内の覆土は、灰・炭化物・焼土粒を含む黒褐色土であった。



第6図 S I 01

遺物は散漫な出土状況を示し、量も少ない。1は土師器の壊で、住居跡南側から出土した破片が接合してほぼ完形に復原できたものである。口径13.4cm、器高3.5cmを測る。底部は平底化

しており、体部との境に稜を有する。外面はヘラケズリの後ナデが加えられ、内面はミガキに近いナデが加えられる。口唇部はヨコナデされる。底部外面に墨書が認められる。「繁」?であろうか。乳褐色を呈し、焼成は良い。2は須恵器の蓋でカマド内から出土したものである。体部から天井部にかけての部分で $2/5$ が遺存している。推定口径14cm、遺存高2.9cmを測る。天井部は回転ヘラケズリされる。胎土には石英粒・雲母粒を含み、暗灰褐色を呈する。焼成は良い。



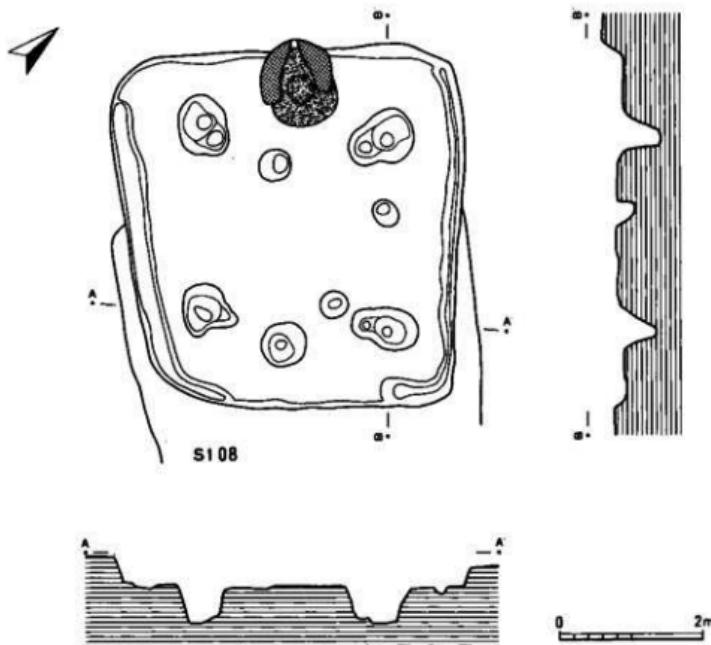
第7図 SI 02

S I 02 (第7図、図版2)

調査区の南西端、B3-10・11グリッド等に検出された。北側約5mにS I 01が位置する。

平面形は長方形を呈し、規模は東西5.5×南北5mを測る。検出面からの掘り込みの深さは深いところで20cm、平均して15cm前後を測る。壁溝はカマドの部分を除いて全周し、幅約20~30cm、深さ約3~10cmを測る。ピットは4本検出された。いずれも主柱穴と考えられ、深さは60~70cmを測る。床面は凹凸に富み、軟弱である。覆土はロームブロックを含む暗褐色土の單一層であった。カマドは北壁の中央に構築されている。耕作時の擾乱を受けているが、今回調査したカマドの中では比較的遺存状態が良い。両袖と火床部が確認できた。

遺物は散漫な出土状況を示し、量も少ない。1は内面黒色処理された土師器壊で、住居跡西側から出土したものである。1/4が遺存している。推定口径14.3cm、器高4.4cmを測る。外側底部下端は回転ヘラケズリされる。底部外面には静止系切り痕が認められ、周縁部には回転ヘラケズリが施される。乳褐色を呈し、焼成は良い。2は須恵器の壺の破片で、住居跡の西側から出土したものである。胴部外面には平行タタキが施される。胎土には石英粒を多く含み、淡黄灰色を呈する。断面は器肉が黄灰色、器表が橙褐色のサンドイッチ状を成す。焼成は良い。



第8図 S I 03

S I 03 (第8図、図版3)

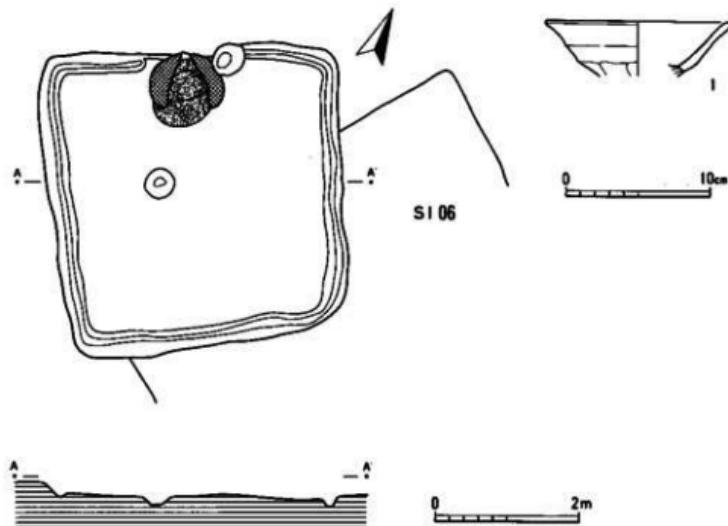
調査区の南東端、B3-08・09グリッド等に検出された。南東側でS I 08・09と重複し、S I 03の方が新しい。

平面形はやや長方形を呈し、規模は東西4.7×南北4.9mを測る。検出面からの掘り込みの深さは5~35cmと差があり、北側が深い。壁溝は北壁と南壁の3/5を除いて検出された。ピットは8本検出された。壁際の4本は主柱穴と考えられる。いずれも2つのピットからなり、内側が35cm~45cm、外側が50cm~65cmと外側の方が深い。浅い内側のピットが古いと考えられ、拡張により柱の位置がやや外側へ広がったものと思われる。南壁際のピットは出入口ピットと考えられる。深さ30cmを測る。その他のピットは20~30cmとやや浅い。床面は凹凸に富み、軟弱である。覆土はローム粒を含む暗褐色土を主体としたものであった。カマドは北壁の中央に構築されている。耕作時の擾乱を受けてはいるが比較的遺存状態は良く、両袖と火床部が確認できた。

遺物は散漫な出土状況を示し、量も少ない。図示できるものはない。

S I 04 (第9図、図版3)

調査区の南東端、D2-90・91グリッド等に検出された。東側でS I 06と重複し、S I 04の方が新しい。



第9図 S I 04

平面形はほぼ正方形を呈し、規模は東西4×南北4.1mを測る。検出面からの掘り込みの深さは平均して20cm前後を測る。壁溝はカマドの部分を除いて全周し、幅約20~40cm、深さ約5~10cmを測る。ピットは2本検出された。住居跡の中央やや西よりの床面から検出されたものは柱穴の可能性も考えられるが、深さ約12cmと浅い。カマド右脇から検出されたものは検出面からの深さ約66cmを測るが、性格は不明である。床面は凹凸に富み、軟弱である。覆土はロームブロックを含む暗褐色土の單一層であった。カマドは北壁の中央に構築されている。耕作時の擾乱を受けてはいるが、両袖と火床部が確認できた。

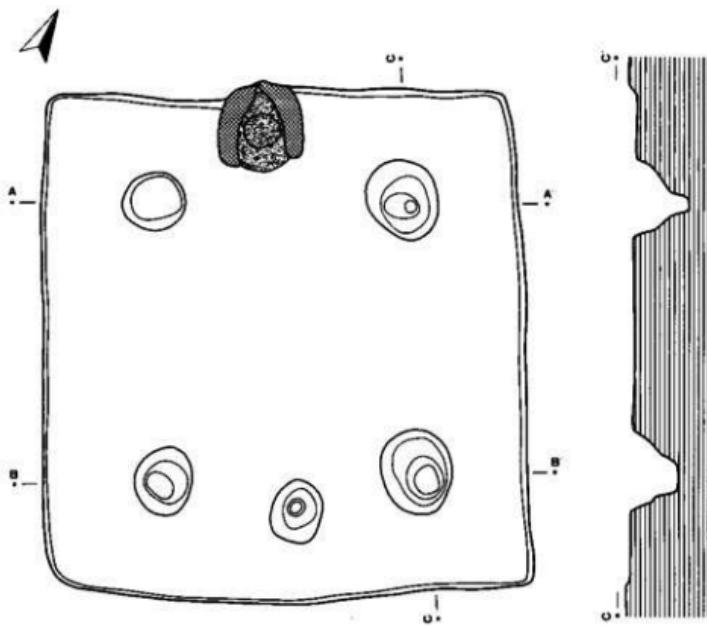
遺物は散漫な出土状況を示し、量も少ない。1は土師器の壺で、2/5が遺存している。推定口径12.8cm、遺存高3.7cmを測る。外面体部下端はヘラケズリされる。乳橙色を呈し、焼成は良い。

S I 05 (第10図、図版4)

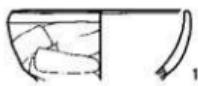
調査区の北東、C2-18・19グリッド等に検出された。南側約27mにS I 03が位置する。

平面形は正方形を呈し、規模は東西6.7×南北6.8mを測る。検出面からの掘り込みの深さは平均して5cm前後を測る。壁溝は検出されなかった。ピットは5本検出された。やや大きめの4本のピットは主柱穴と考えられる。深さは50~70cmを測る。南壁際のやや小さめのピットは、出入口ピットと考えられる。深さ約55cmを測る。床面は凹凸に富み、軟弱である。覆土はロームブロックを含む暗褐色土の單一層であった。カマドは北壁の中央やや西よりに構築されている。耕作時の擾乱を受けてはいるが、両袖と火床部が確認できた。

遺物は散漫な出土状況を示し、量も少ない。1は土師器の壺で、2/5が遺存している。推定口径12cm、遺存高4.8cmを測る。体部外面は粗くヘラケズリされ、口唇部はヨコナデされる。胎土には砂粒を多く含む。橙褐色を呈し、焼成は良い。2は土師器の粗製の高杯であろうか。1/3が遺存する。推定脚径10.6cm、遺存高6.6cmを測る。内外面とも粗くヘラナデされる。胎土には砂粒を多く含み、全体的に粗い作りである。橙褐色を呈する。



0 2m



0 10cm

第10圖 SI 05

S I 06 (第11図、図版4)

調査区の南東、D2-91、D3-01グリッド等に検出された。西側でS I 04、東側でS I 07と重複し、S I 04より古いが、S I 07との前後関係は明らかではない。東側1/3は調査区域外にあるため調査できなかった。

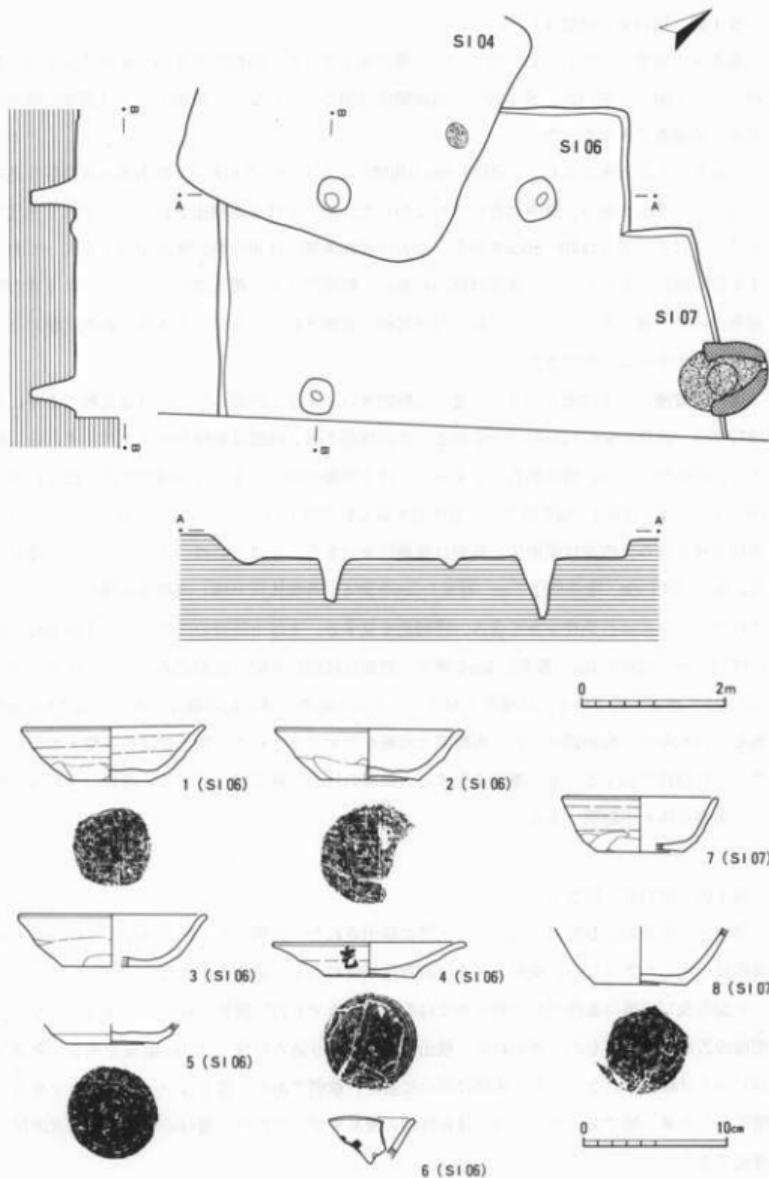
平面形は方形と考えられ、一辺約5.9mの規模になるものと思われる。検出面からの掘り込みの深さは約20cmを測る。壁溝は検出されなかった。ピットは3本検出された。いずれも主柱穴と考えられる。深さは60~80cmを測る。なお住居跡東側には耕作時の擾乱が大きく入っており、4本目は検出できなかった。床面は凹凸に富み、軟弱である。覆土はロームブロックを含む暗褐色土の單一層であった。カマドは4号住居跡に破壊されているが、火床部のみを北壁のほぼ中央で検出することができた。

遺物は散漫な出土状況を示すが、量は比較的多い。1は土師器の壺で、ほぼ完形である。口径12.6cm、底径5.6cm、器高3.7cmを測る。外面体部下端と底部は手持ちヘラケズリされる。胎土には石英粒を含み、暗赤褐色を呈する。2は土師器の壺で、1/3が遺存する。推定口径13cm、底径7cm、器高3.5cmを測る。外面体部下端と底部は手持ちヘラケズリされる。胎土には石英粒を多く含み、内面は暗橙色、外面は黒褐色を呈する。3は土師器の壺で、2/5が遺存する。推定口径13cm、推定底径7cm、器高3.6cmを測る。外面体部下端と底部は手持ちヘラケズリされる。胎土には石英粒を多く含み、橙褐色を呈する。4は土師器の皿で、3/4が遺存する。口径13.4cm、底径5.4cm、器高2.3cmを測る。底部には回転糸切り痕が認められる。体部外面には「宅」と墨書きされている。淡褐色を呈する。5は土師器の壺の底部破片である。底径6.4cmを測る。回転糸切り痕が認められ、周縁部は回転ヘラケズリされる。胎土には石英粒・雲母粒を含み、乳橙色を呈する。6は墨書きを有する土師器の壺の口縁部破片である。墨書きの字形は不明で、墨書き自体も不鮮明である。

S I 07 (第11図、図版4)

調査区の南東端、D2-91・92グリッド等に検出された。西側でS I 06と重複しているが、前後関係は明らかではない。東側2/5は調査区域外にあるため調査できなかった。

平面形及び規模は重複のため明らかではないが、カマドの位置等からして、ほぼ一辺が4m前後の方形を呈するものと思われる。検出面からの掘り込みの深さは20cm前後を測る。壁溝及びピットは検出されなかった。床面は凹凸に富み、軟弱である。覆土はロームブロックを含む暗褐色土の單一層であった。カマドは耕作時の擾乱を受けており、遺存の悪い両袖と火床部が確認できた。



第11図 SI 06・07

遺物は散漫な出土状況を示し、量も少ない。7は土師器の坏で、1／4が遺存する。推定口径11cm、推定底径6cm、器高3.7cmを測る。外面体部下端と底部は手持ちヘラケズリされる。胎土には砂粒を多く含み、乳橙色を呈する。8は土師器の坏の底部破片である。底径7.4cm、残存器高3.4cmを測る。底部には静止糸切り痕が認められる。内面は乳橙色、外面は赤褐色を呈する。

S I 08 (第12図、図版4)

調査区の南東端、C3-09・19グリッド等に検出された。西側でS I 03、東側でS I 09・10と重複し、S I 10より新しく、S I 03より古いが、S I 09との前後関係は明らかではない。

平面形及び規模は重複のため明らかではないが、遺存している壁からして、東西4.5×南北4.9mの長方形を呈するものと思われる。検出面からの掘り込みの深さは30cm前後を測る。壁溝及びピットは検出されなかった。床面は凹凸に富み、軟弱である。覆土はロームブロックを含む暗褐色土の単一層であった。カマドは西壁側に構築されていたと思われるが、S I 03との重複により遺存していない。

遺物は散漫な出土状況を呈し、量も少ない。図示できるものはない。

S I 09 (第12図、図版4)

調査区の南東端、C3-19・29グリッド等に検出された。西側でS I 03・08、東側でS I 10と重複し、S I 03より古く、S I 10より新しいが、S I 08との前後関係は明らかではない。

平面形及び規模は重複のため明らかではないが、遺存している壁からして、ほぼ一辺が3.8m前後の方形を呈するものと思われる。検出面からの掘り込みの深さは20cm前後を測る。壁溝は検出されなかった。ピットは5本検出された。壁際の4本はいずれも深さ35cm前後で、主柱穴と考えられる。中央の1本は深さ20cmとやや浅い。床面は凹凸に富み、軟弱である。覆土はロームブロックを含む暗褐色土の単一層であった。カマドはS I 03・09との重複により、遺存していない。

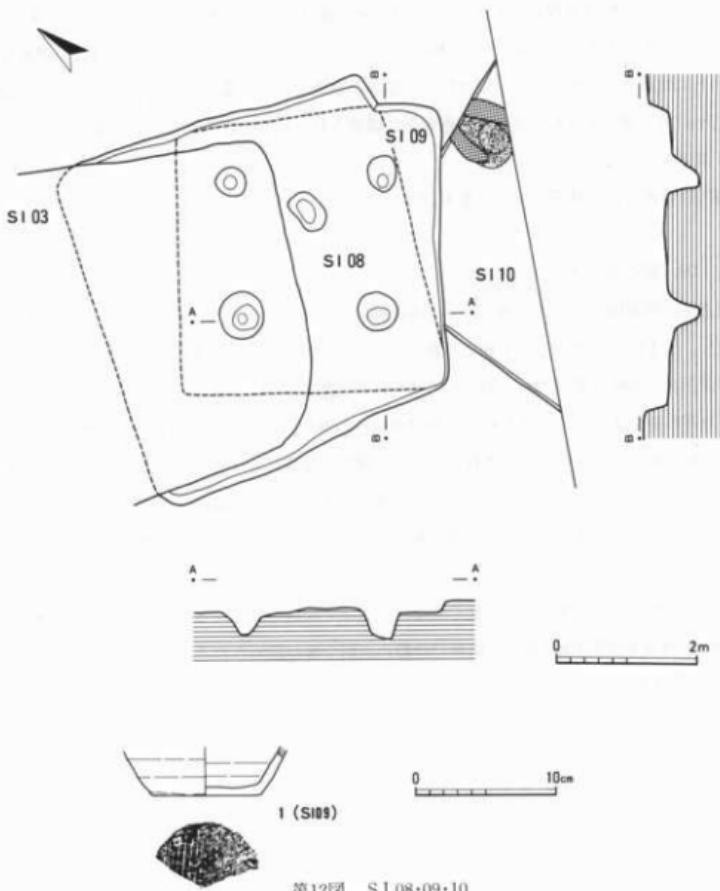
遺物は散漫な出土状況を示し、量も少ない。1は土師器の坏で、2／5が遺存する。推定底径7.5cm、残存器高3.4cmを測る。底部には静止糸切り痕が認められる。内面は乳橙色、外面は赤褐色を呈する。

S I 10 (第12図、図版4)

調査区の南東端、D3-10・20グリッド等に検出された。西側でS I 08・09と重複し、S I 08・09の方が新しい。東側3/5は調査区域外にあるため調査できなかった。

平面形は、遺存している壁及びカマドの位置等からして、一辺が約5m前後の方形を呈するものと思われる。検出面からの掘り込みの深さは5cm前後と極めて浅い。壁溝及びピットは検出されなかった。床面は凹凸に富み、軟弱である。覆土はロームブロックを含む暗褐色土の單一層であった。カマドは北壁のほぼ中央と思われる位置に構築されていた。耕作時の擾乱を大きく受けていたが、遺存の悪い両袖と火床部が確認できた。

遺物はカマド内から若干の土器が出土しただけで、図示できるものはない。

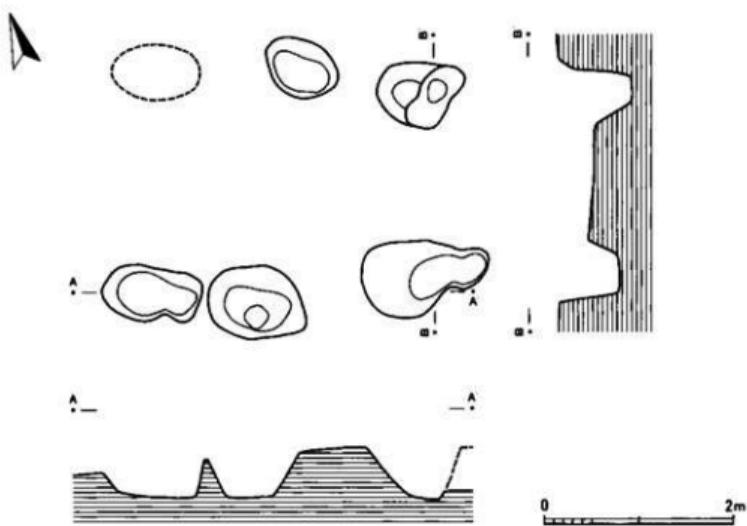


第12図 S I 08・09・10

2. 挖立柱建物跡

S B01 (第13図)

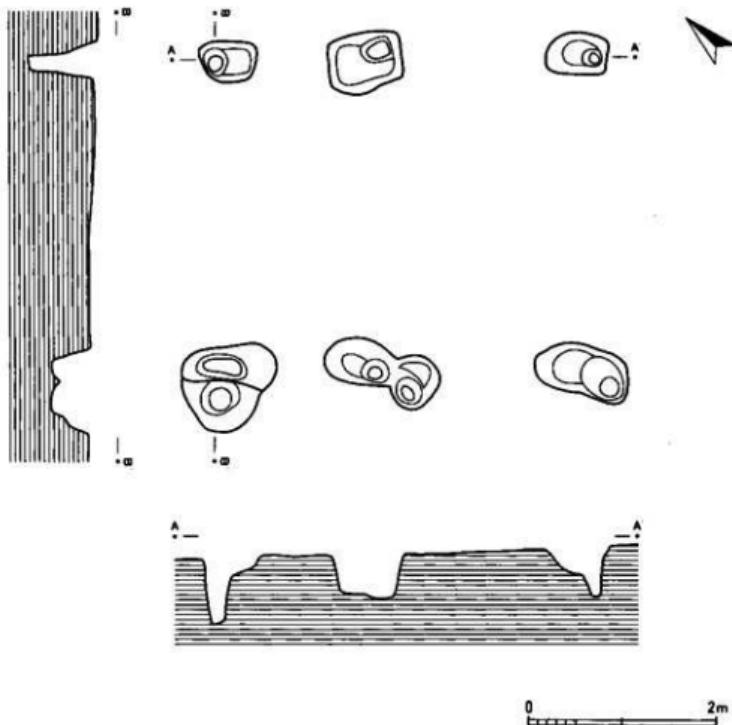
調査区の南東C2-85・86グリッドに検出された。南東側でS K18と重複するが、S B01の方が新しい。1間×2間で、長軸3m、短軸2mの長方形を呈する。柱穴はいずれも不整な橢円形を呈し、径0.8~1.4m、深さ0.3~0.65mを測る。遺物は出土していない。



第13図 SB01

S B02 (第14図、図版5)

調査区の中央や北東のC2-54・55グリッド等に検出された。1間×2間で、長軸4m、短軸3.4mの長方形を呈する。柱穴はいずれも不整な橢円形を呈し、径0.6~1m、深さ0.35~0.95mを測る。遺物は出土していない。



第14図 SB02

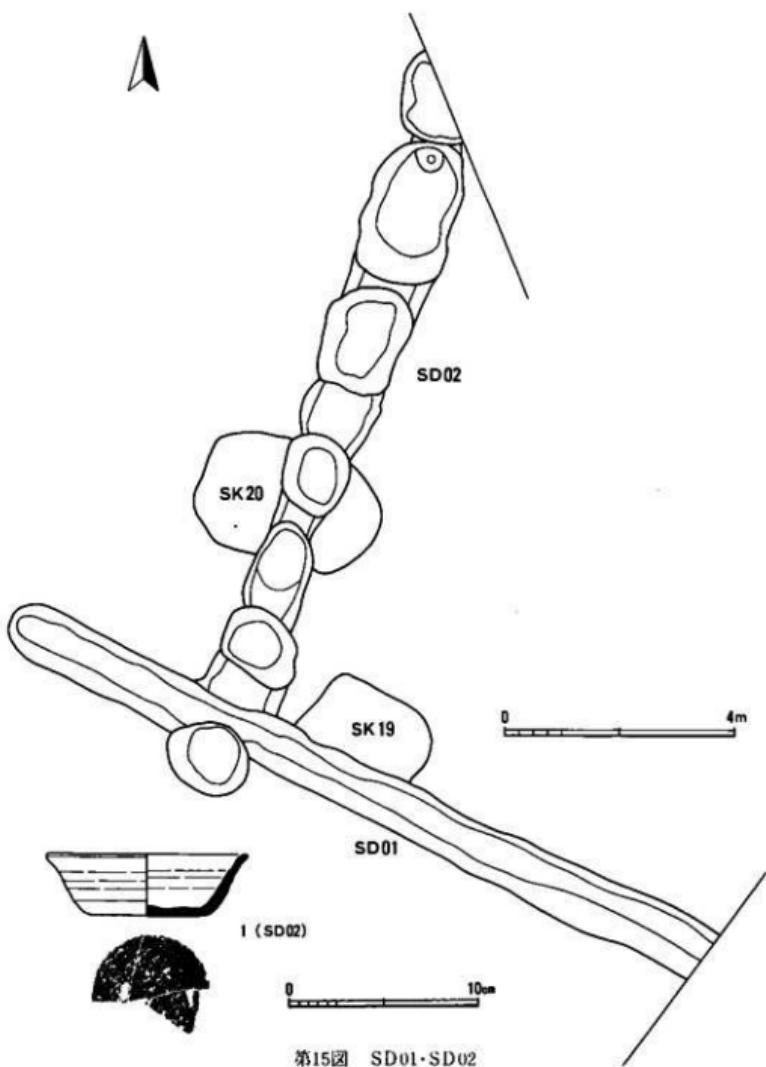
3. 溝・柵列

S D01 (第15図、図版5)

調査区の南東端で検出され、北西から南東方向に走る溝である。SK19・SD02と重複するが、SD02より古く、SK19より新しい。検出された全長は13.5mで南東側は調査区外に延びている。幅約1m、深さ0.25~0.5mで東側が浅くなる。覆土はローム粒を含む黒褐色土である。遺物は覆土中から土師器を主体として土器片が少量出土しているのみで図示できるものはない。

S D02 (第15図、図版5)

調査区の南東で検出され、南西から北東に走る柵列である。SK20・SD01と重複するが、SD02の方が新しい。検出された全長は13.5mで北東側は調査区外に延びている。幅0.8~1.4m、深さ0.2mの溝状の掘り込みの中に、椭円形で径1~2.5m、深さ0.3~0.7mの柱状の掘り込



第15図 SD01・SD02

みが8基並んでいる。覆土はローム粒を含む黒褐色土である。遺物は覆土中から土師器を主体として土器片が少量出土している。その他煙管が出土している(第19図)。1は須恵器の壊で3／5が遺存する。推定口径13.8cm、器高4.2cmを測る。外面体部下端は回転ヘラケズリされる。底部は手持ちヘラケズリされ、切り離し技法は不明である。胎土中に石英粒を多量に含み、淡灰色を呈する。焼成は良い。

4. 土坑

今回の調査では最終的に69基の土坑が調査された。これらの土坑のうちには覆土の状況等からして近代以降の可能性の高いものも含まれている。したがってここでは覆土の状況や形態、遺物等から明らかに遺構としてとらえられるもののみを対象として記述する。

S K01 (第16図、図版 6)

調査区西側のC2-60・70グリッド等に検出された。規模は $2.7 \times 2.2\text{m}$ で、隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは 0.65m を測る。底面はほぼ平坦である。覆土は、上部は擾乱が著しいため不明だが、下部はロームブロックを含む黒褐色土を主体とする。遺物は覆土中から瀬戸・美濃産の天目茶碗の底部が出土している。

S K03 (第16図、図版 6)

調査区の南西端のC3-11・12グリッド等に検出された。規模は $2.8 \times 1.7\text{m}$ で、長方形を呈する。検出面からの深さは 0.3m を測る。底面はほぼ平坦である。覆土はロームブロックを主体とする黒褐色土からなる。遺物は出土していない。

S K05 (第16図、図版 6)

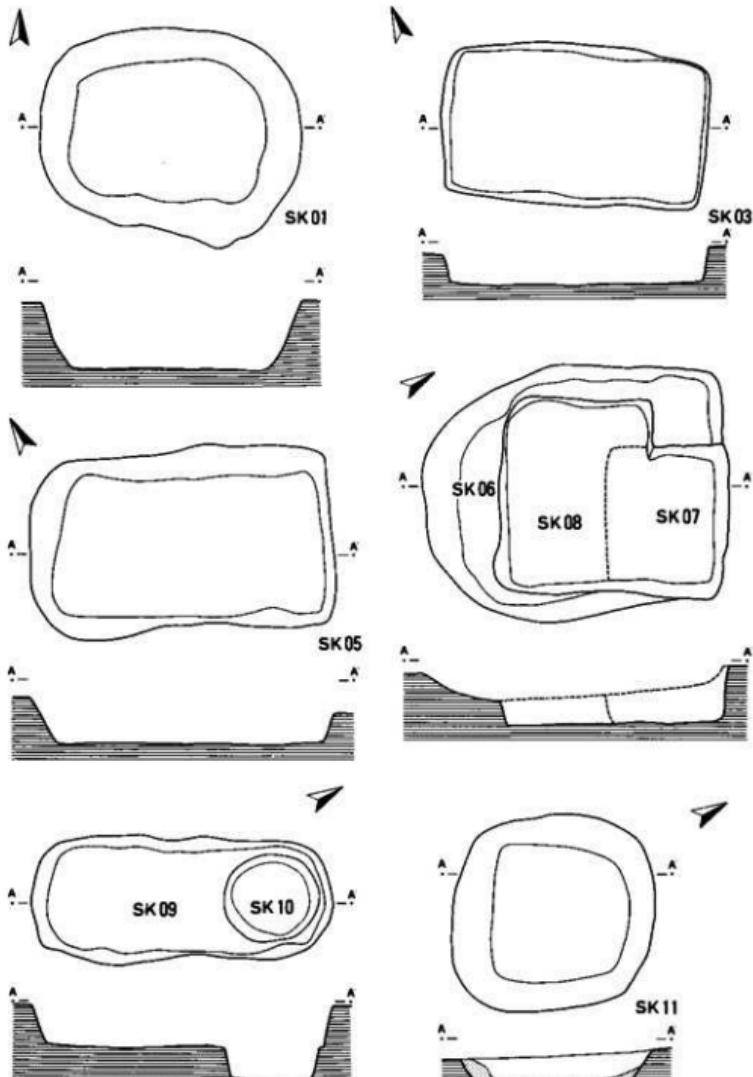
調査区の中央やや北寄りのC2-34・35グリッドに検出された。規模は $3.2 \times 1.8\text{m}$ で、隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは 0.45m を測る。底面はほぼ平坦である。覆土はロームブロックを主体とする暗褐色土からなる。遺物は出土していない。

S K06・07・08 (第16図)

調査区の中央やや北側寄りのC2-23・24グリッドに検出された重複する3基の土坑である。S K08→07→06の順に新しくなる。S K06は規模 $3.2 \times 2.65\text{m}$ の不整な梢円形を呈し、深さは 0.25m を測る。底面はほぼ平坦である。覆土はローム粒を主体とする黒褐色土からなり、遺物は出土していない。S K07は規模 $1.55 \times 1.3\text{m}$ のやや長方形を呈し、深さは 0.55m を測る。底面はほぼ平坦である。覆土はロームブロックを含む黒褐色土を主体とし、遺物は出土していない。S K08は規模 $2 \times 1.6\text{m}$ の長方形を呈し、深さは 0.55m を測る。底面はほぼ平坦である。覆土はロームブロックを含む黒褐色土を主体とし、遺物は出土していない。

S K09・10 (第16図、図版 6)

調査区の南側C3-12グリッドに検出された。規模は $3.15 \times 1.25\text{m}$ で、隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは 0.4m を測る。底面はほぼ平坦であるが、北側に $1 \times 0.9\text{m}$ 、深さ 0.3m の円形の掘り込み (S K10) がある。覆土はロームブロックを主体とする黒褐色土からなる。遺物



第16図 土塁(1)

0 2m

は出土していない。

S K11 (第16図、図版6)

調査区の中央やや北寄りのC2-32・33グリッド等に検出された。規模は $2.05 \times 1.8m$ で、隅丸の不整な長方形を呈する。検出面からの深さは0.45mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は、上部はロームブロックを主体とする黒褐色土で、下部には黄白色粘土が約10cmの厚さで貼られていた。遺物は出土していない。

S K12 (第17図)

調査区の北西C2-41・42グリッドに検出された。規模は $2.7 \times 1.5m$ で、不整な橢円形を呈する。検出面からの深さは0.15mを測る。底面はほぼ平坦であるが、東側に径0.75m、深さ0.7mの円形の掘り込みがある。覆土はロームブロックを含む暗褐色土で、遺物は出土していない。

S K15・16・26 (第17図、図版7)

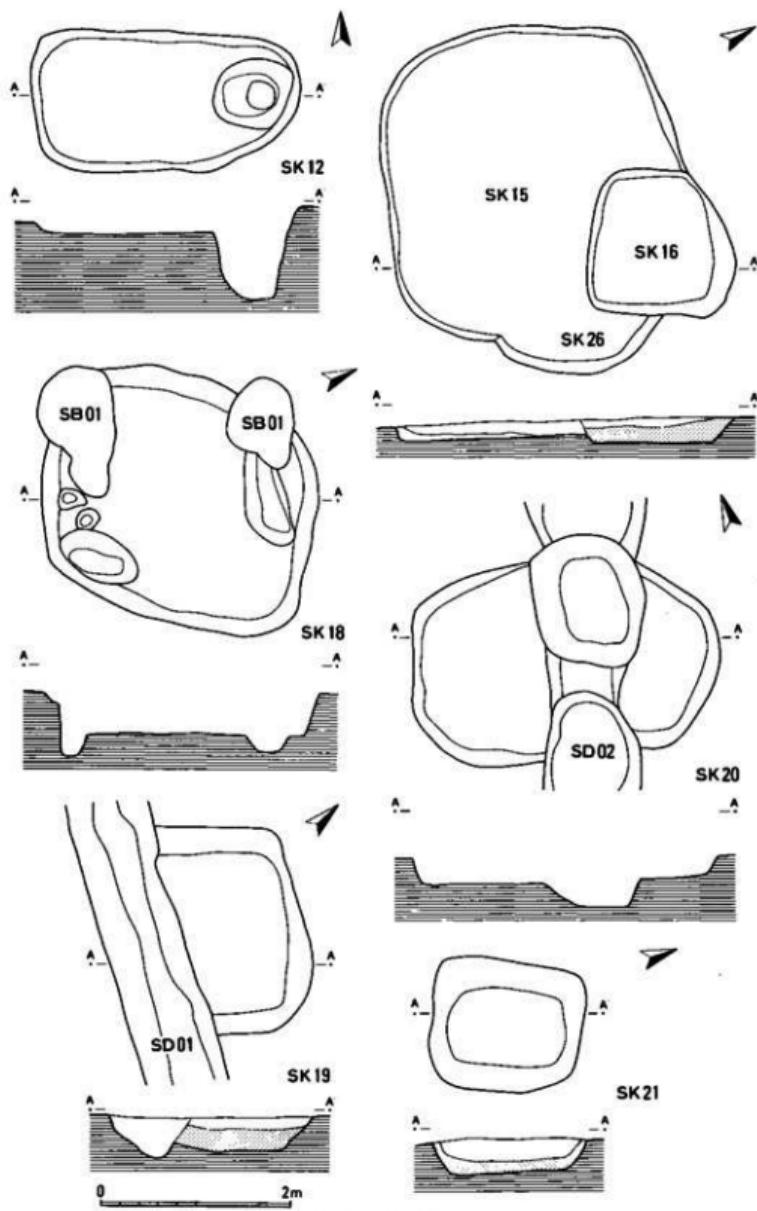
調査区の北西C2-48・49グリッド等に検出された重複する3基の土坑である。S K15より16が新しいが、S K26との新旧関係は不明である。S K15は規模 $3.25 \times 3.15m$ の隅丸方形を呈し、深さは0.15mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土はローム粒を含む暗褐色土で、遺物は出土していない。S K16は規模 $1.5 \times 1.35m$ の不整な方形を呈し、深さは0.25mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は、上部は粘土粒を含む暗褐色土で、下部には黄白色粘土が約15cmの厚さで貼られていた。遺物は出土していない。S K26の規模は重複のため詳細は不明であるが、ほぼ一辺が1.6m程の隅丸方形を呈するものと思われる。深さは0.15mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土はロームブロックを含む暗褐色土で、遺物は出土していない。

S K18 (第17図)

調査区の中央やや南東よりのC2-86・87グリッドに検出された。S B01と重複するが、S B01のほうが新しい。規模は $2.9 \times 2.6m$ で、不整な隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.45mを測る。底面はやや凹凸に富んでおり、ピット状の掘り込みが4本認められる。深さはいずれも0.25m前後を測る。覆土はロームブロックを含む暗褐色土で、遺物は出土していない。

S K19 (第17図)

調査区の南東C2-99、C3-09グリッド等に検出された。S D01と重複するが、S D01の方が新しい。規模は推定すると $2.15 \times 1.9m$ 程度と思われ、不整な橢円形を呈する。検出面からの深さは0.35mを測る。底面はやや凹凸に富む。覆土は、上部はローム粒を多く含む黒褐色土で、



第17図 上坑(2)

下部には黄白色粘土が約25cmの厚さで貼られていた。遺物は覆土中から瀬戸・美濃産の灰釉の茶碗の破片が出土している。

S K20 (第17図)

調査区の南東C2-89・99グリッドに検出された。S D02と重複するが、S D02の方が新しい。規模は $3.25 \times 2.1m$ で、不整な橢円形を呈する。検出面からの掘り込みは0.25mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土はローム粒を含む暗褐色土で、遺物は出土していない。

S K21 (第17図)

調査区の北西B2-49グリッドに検出された。規模は $1.6 \times 1.35m$ で、隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.35mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は、上部はローム粒を多く含む暗褐色土で、下部には黄白色粘土が約15cmの厚さで貼られていた。遺物は出土していない。

S K22 (第18図)

調査区の中央やや北西のC2-42・52グリッドに検出された。規模は $2 \times 1.8m$ で、不整な隅丸の長方形を呈する。検出面からの深さは0.45mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は、上部はロームブロックを多く含む暗黄褐色土で、下部には黄白色粘土が約10cmの厚さで貼られていた。遺物は出土していない。

S K23 (第18図、図版7)

調査区の北西端B2-29グリッドに検出された。規模は径2.4mで、不整な円形を呈する。検出面からの深さは平均して0.75mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は、上部は攢乱が著しく不明である。中部はローム粒を多く含む暗褐色土で、下部には黄白色粘土が約10cmの厚さで貼られていた。遺物は粘土層中から瀬戸・美濃産の灰釉の鉢（第21図）・皿の破片及び磨石（第25図）・炭化材が出土している。

S K24 (第18図、図版7)

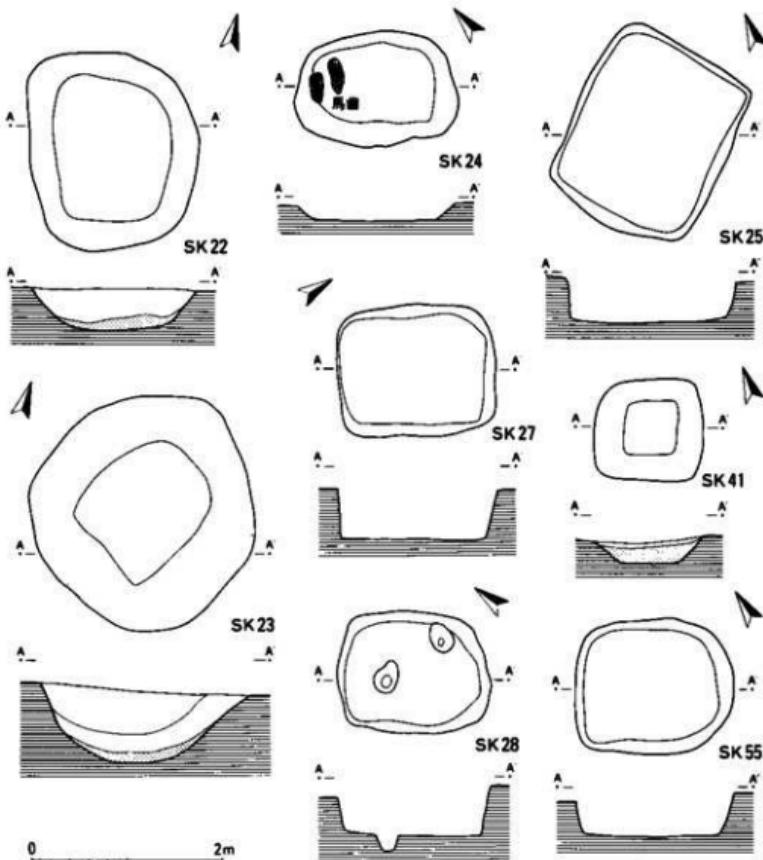
調査区の中央やや南東よりのC2-86・96グリッドに検出された。規模は $3.4 \times 2.4m$ で、隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.35mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土はローム粒を多く含む暗褐色土で、中位から馬齒が出土している。遺物は出土していない。

SK 25 (第18図)

調査区のほぼ中央C2-63・64グリッド等に検出された。規模は 2×1.7 mで、隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.45mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土はロームブロックを多く含む暗褐色土で、遺物は出土していない。

SK 27 (第18図)

調査区のほぼ中央C2-54・64グリッドに検出された。規模は 1.7×1.4 mで、隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.5mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土はロームブロックを多く含む暗褐色土で、遺物は出土していない。



第18図 土坑(3)

S K28 (第18図)

調査区のほぼ中央C2-53-63グリッドに検出された。規模は $1.6 \times 1.25\text{m}$ で、隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは $0.35\sim 0.5\text{m}$ を測る。底面はほぼ平坦で、ピットが2本検出された。深さは約 0.2m である。覆土はロームブロックを多く含む暗褐色土で、遺物は出土していない。

S K41 (第18図)

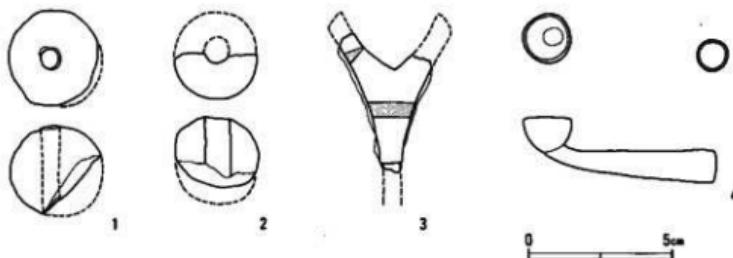
調査区の中央やや南C2-84グリッドに検出された。規模は $1.15 \times 1.05\text{m}$ で、ほぼ方形を呈する。検出面からの深さは 0.2m を測る。底面はほぼ平坦である。覆土は、上部はロームブロックを多く含む暗褐色土で、下部には黄白色粘土が約 15cm の厚さで貼られていた。遺物は出土していない。

S K55 (第18図)

調査区の中央やや北のC2-44・45グリッドに検出された。規模は $1.65 \times 1.4\text{m}$ で、隅丸方形を呈する。検出面からの深さは $0.35\sim 0.45\text{m}$ を測る。底面はほぼ平坦である。覆土はロームブロックを多く含む暗褐色土で、遺物は出土していない。

5. その他の遺物 (第19図)

1はSK55出土の土玉で、3／5ほどが遺存する。2は遺構外出土の土玉の半欠品である。3は遺構外出土の雁股式の鉄鎌で、刃部先端を欠失する。鏽が著しく、遺存状態が悪い。4はSD02出土の煙管の雁首部である。



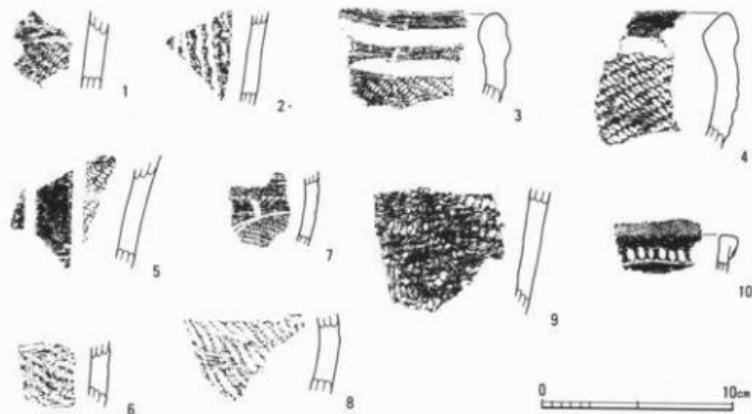
第19図 その他の遺物

6. 遺構外出土土器（第20・21図）

ここでは、グリッド・トレンチ出土や表土層出土などの遺構に伴わない土器及び遺構内出土であっても明らかに混入と考えられる土器について記述する。

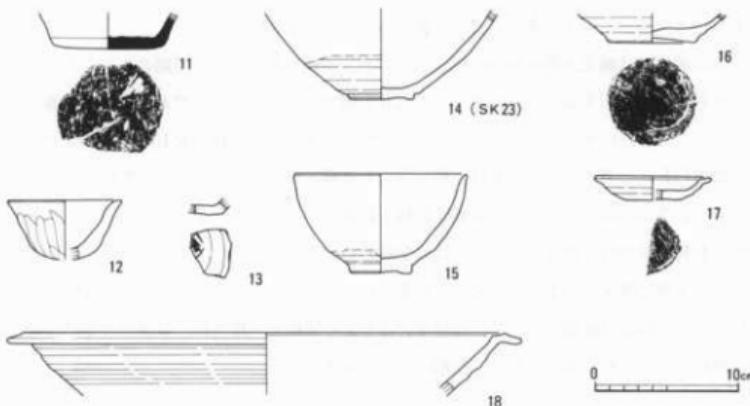
今回の調査では縄文土器が約30点出土している。中期を中心とした時期のものである。これらのうち9点を図示することができた。1はRL縄文が施されるものである。2は沈線が施されるものである。いずれも前期のものと考えられる。3～5は沈線とRL縄文が施されるもので、加曾利E式と考えられる。6は半截竹管とLR縄文が施されるもので、やはり加曾利E式となろう。7は沈線と刻み目、RL縄文が施されるもので、加曾利B式と考えられる。8・9は太いLR縄文が施されるもので、やはり加曾利B式となろう。

今回の調査で確実に弥生土器と考えられるのは2点のみである。そのうち1点を図示することができた。10は口縁部の破片で、口唇部にはLRの細縄文が施され、口縁部下端には縄文原体の押捺が加えられるものである。後期のものと考えられる。



第20図 遺構外出土土器(1)

遺構外からは比較的多量の土師器・須恵器・陶磁器が出土しているが、細片が多く図示できるものは極めて少ない。11は須恵器の底部破片である。底径7.6cm、遺存高2.5cmを測る。体部下端は回転ヘラケズリされ、底部は手持ちヘラケズリされる。胎土には石英粒を多く含み、暗い青灰色を呈する。12は土師器のミニチュア土器で、2／5が遺存する。外面はヘラケズリされる。焼成は良く、乳褐色を呈する。口径8cm、遺存高3.9cmを測る。13は墨書き有する土師器



第21図 遺構外出土土器(2)

の壊の底部破片である。墨書の字形は不明であるが、残存する墨書は明瞭である。14はSK23から出土した瀬戸・美濃産の鉢の体部中位から底部である。底部は回転ヘラケズリされ、削り出し高台となる。内面と外面の体部中位には緑色の灰釉がかかる。底径4.5cm、遺存高5.8cmを測る。15は瀬戸・美濃産の天目茶碗で3／5が遺存する。体部には内・外面とも鉄釉がかかる。底部は回転ヘラケズリされ、削り出し高台となる。口径12cm、底径4.2cm、器高6.7cmを測る。16は土師質土器の底部破片である。底部は回転糸切り後無調整である。焼成は良く、橙褐色を呈する。17は瀬戸・美濃産の皿で、1／2が遺存する。底部は回転糸切りされ、体部内面には淡黄色の灰釉がかかる。口径8cm、底径3.9cm、器高1.6cmを測る。18は瀬戸・美濃産の折縁の深皿の口縁部破片である。内・外面とも淡黄色の灰釉がかかる。推定口径34cm、遺存高4.4cmを測る。

このほかに、浅い整理箱1箱分の陶磁器が出土している。中世では瀬戸・美濃産の灰釉の碗・小皿・鉢、常滑産の大壺・鉢、近世では徳利・擂鉢・焙烙等である。

7. 石器（第22図～第25図、図版9）

1～6は縄文時代の石器と思われる。縄文土器の時期が中期～後期のものが多く出土していることから、おそらく中期～後期の所産の石器と思われる。7～14は奈良・平安時代の所産の石器である可能性が高い。15～19はどの時期の所産のものであるか不明である。

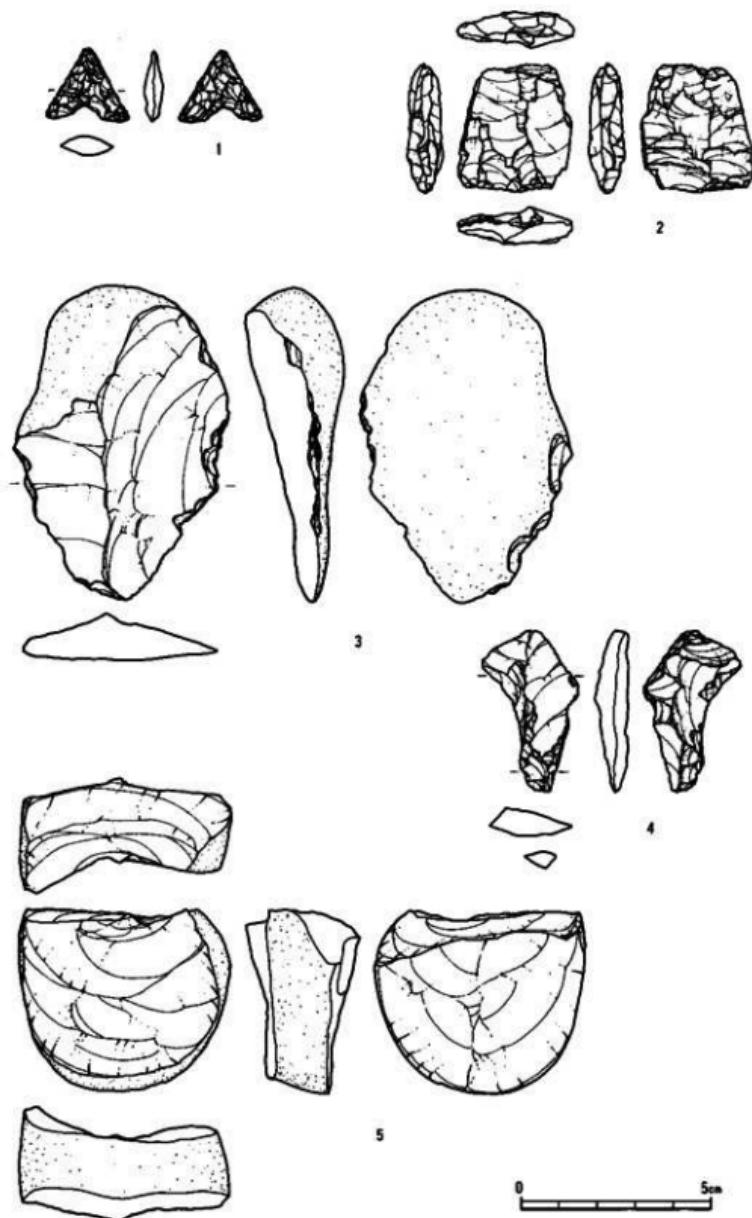
1は石錠である。全面に細かい調整加工が施されている。2は楔形石器である。両極削離によって生産された剝片を素材として長軸方向に加工が施されている。3は削器である。4は下端部に両側縁から調整加工が施されている二次加工のある剝片である。5は円錐を分割した剝片である。6は磨製石斧の基部が残存したものである。円錐を素材として、両面を調整加工によって成形した後に平坦面は研磨されている。7～14は砥石である。7～9は直方体の形状である。研磨痕は、両面と側面部には認められるが上下両端部には認められない。10は分割錐を素材として、平坦面に研磨痕が認められる。11～13は細長い直方体の形状である。平坦面は研磨によって窪んでいる。14は分割してしまった砥石の未製品と思われる。15～17は磨石である。18・19は敲石である。磨石・敲石ともに円錐を素材としている。

なお、7～14の砥石の特徴から、製作過程を次の①～③の工程に推定復原した。

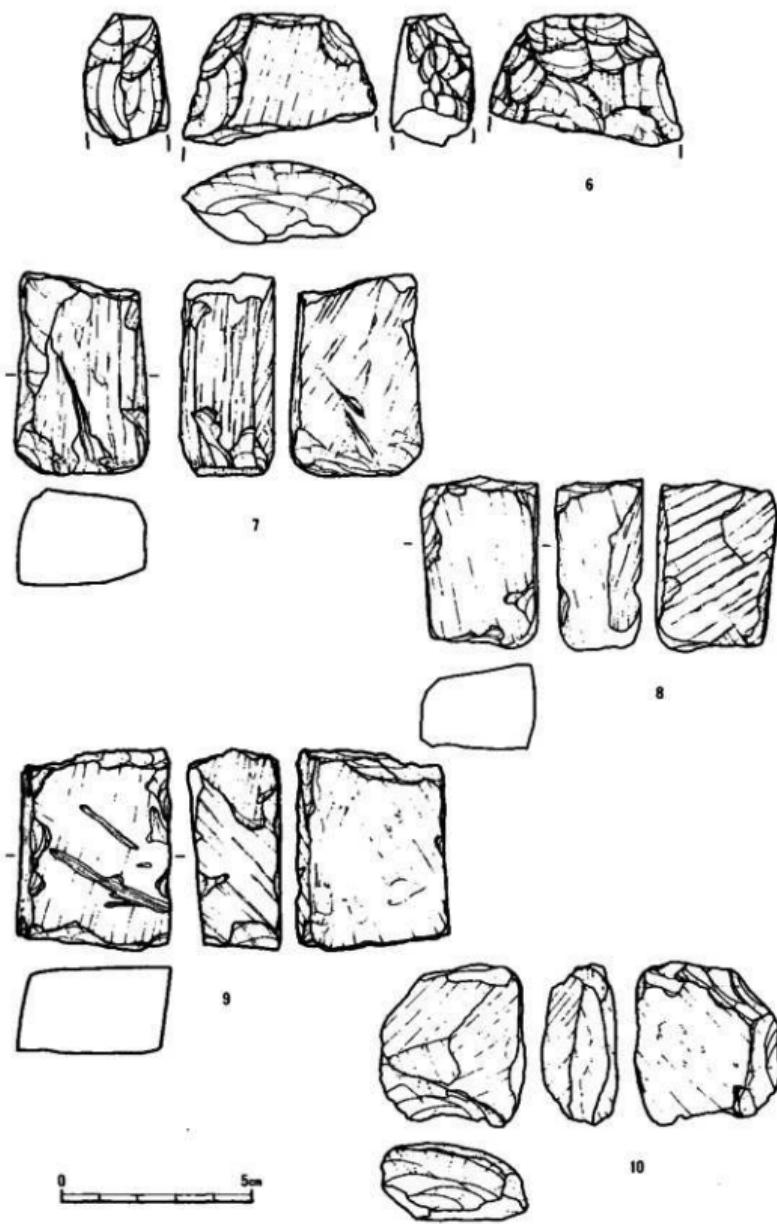
- ①素材原形の製作は、大形の柔らかい凝灰岩を母岩として、1～2mm程度の線状の溝が数条同一直方向にみられることから、鋸のようなもので直方体の素材原形を切り出す。
- ②素材製作は、素材原形を用途に応じて適当な大きさに切り出す。
- ③研磨は、表裏・両側面に行われる。研磨が進むにしたがって、直方体の中央部が窪んでいき、器体が薄くなり中央部で折れてしまう。上下両端部のうち厚みのある方は、切り出し痕が認められるが、薄い方は折れ面であることから、このことは証明できる。この時点で砥石は使用されずに破棄される。

石器属性表

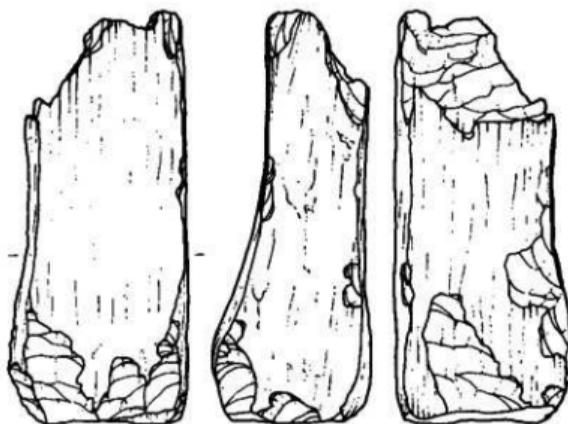
番号	器種	石材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	遺物番号	番号	器種	石材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	遺物番号
1	石錠	チャート	19.2×21.3×4.7	1.1	C1-03	11	砥	石 凝灰岩	146.2×63.3×57.7	745.0	C2-79
2	楔形石器	チャート	33.0×29.1×9.0	10.2	C2-91	12	砥	石 凝灰岩	48.7×22.1×15.6	21.8	
3	削器	安山岩	80.2×55.8×25.8	88.1	表掲	13	砥	石 凝灰岩	64.8×23.4×21.9	39.5	C2-99
4	二次加工の ある剝片	チャート	41.6×25.5×8.9	5.7		14	砥	石 凝灰岩	31.9×22.7×14.3	11.3	
5	剝片	安山岩	46.8×55.3×29.6	92.4	C2-79	15	磨	石 凝灰岩	74.8×65.1×50.0	367.0	SK23
6	石斧	石英ハン岩	34.8×50.6×21.4	50.6	SI01	16	磨	石 砂岩	62.0×50.0×15.0	66.9	SI09
7	砥	石 凝灰岩	52.3×35.1×24.8	72.3	表掲	17	磨	石 石英ハン岩	68.3×62.0×31.1	220.7	SK23
8	砥	石 凝灰岩	44.1×30.2×22.1	47.7		18	敲	石 石英ハン岩	67.7×38.0×38.0	110.6	
9	砥	石 凝灰岩	52.3×40.2×24.4	86.4		19	敲	石 凝灰岩	110.0×42.2×29.0	199.7	
10	磨	石 砂岩	41.6×38.3×19.6	43.7	SI06						



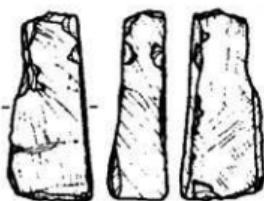
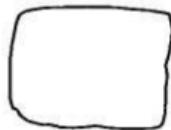
第22圖 石器(1)



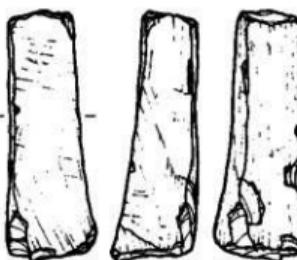
第23図 石器(2)



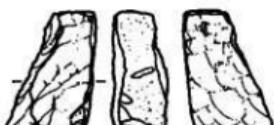
11



12



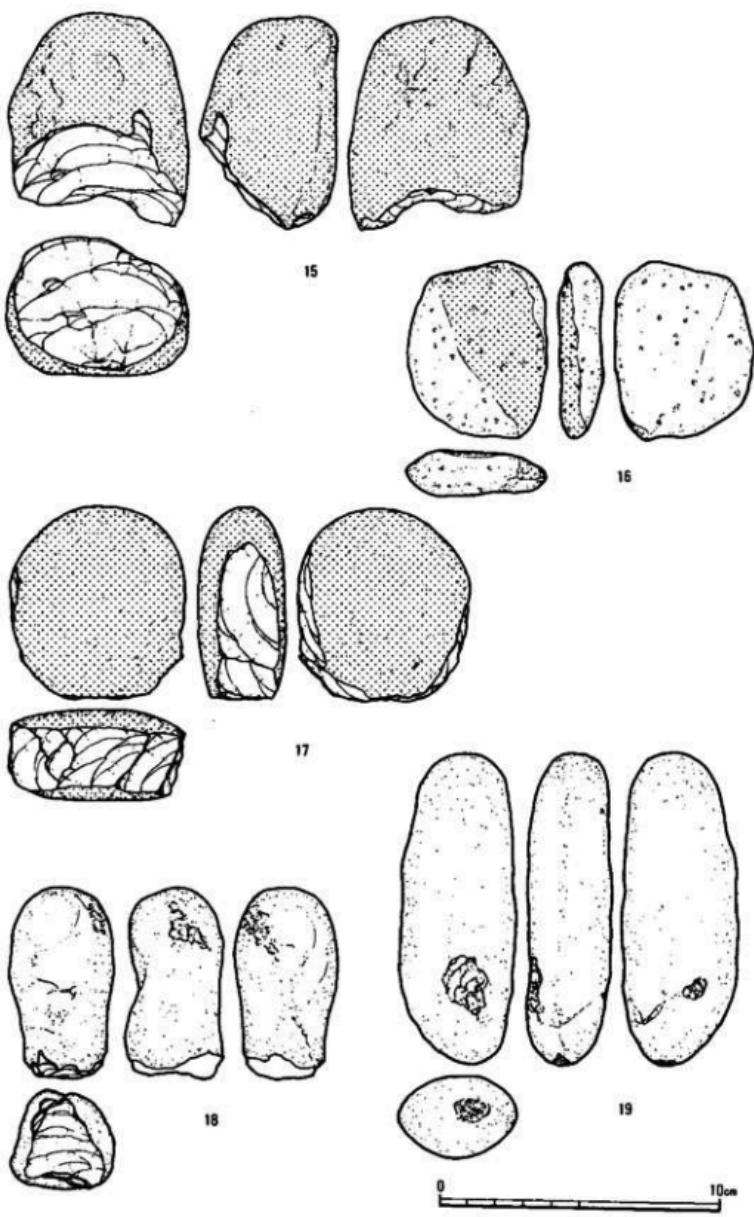
13



14



第24图 石器(3)



第25图 (4器)

第3章 まとめ

1. 古墳時代以前

今回の調査は遺跡の中央にあけた大きな試掘グリッドとも言うべきもので、最終的に約2,000m²を対象として発掘調査を行い、堅穴住居跡10軒、掘立柱建物跡2棟、溝1条、柵列1列、土坑25基が検出された。ここでは、今回の調査で得られた成果をもとに、かつて調査された成果を加え若干のまとめを行いたい。

今回の調査では旧石器時代についても確認調査を行い、遺構・遺物の検出につとめたが、遺構はもとより遺物も検出されなかった。以前の調査でも旧石器時代の遺構・遺物は検出されていない。縄文時代ではわずかな土器片が出土しているのみで、遺構は検出されていない。縄文土器は中期を主体としたもので、以前の調査でも中期の土器が出土している。また弥生時代も後期の遺物が若干出土しているだけで、遺構は検出されていない。以前の調査でも後期の土器が出土している。旧石器・縄文・弥生時代の様相については、調査の規模が小さいこともあり、周辺の遺跡と同様に不明な点が多い。

古墳時代後期に至り、はじめて集落が営まれるようになる。該期の遺構としては住居跡1軒(S I 05)のみである。ただ遺構外出土の遺物の中にハケ目の施されている土器もあり、以前の調査でもこうした遺物が出土している。集落の開始時期が古墳時代中期あるいは前期にさかのぼる可能性もある。

S I 05は完掘することができた。ほぼ正方形の住居跡であるが、遺存状態が悪く、出土遺物も極めて少ない。塊の形態からして7世紀の後半代と考えられる。

2. 奈良・平安時代

該期の遺構としては住居跡が9軒検出され、大袋塔之下遺跡に本格的に集落が営まれるようになる。これらの住居跡のうち完掘できたのは6軒、調査区域外に広がりをもつもの3軒である。いずれも耕作による擾乱が著しく、遺存状態が悪い。また出土遺物も少ない。

S I 01は完掘することができた。正方形の住居跡であるが、遺存状態がやや悪く、出土遺物も少ない。須恵器の蓋は古い様相を示すが、完形に復元できた土師器の壊の形態・技法等から8世紀の後半と考えられる。

S I 02は完掘することができた。長方形の住居跡であるが、遺存状態がやや悪く、出土遺物も少ない。内面黒色処理の壊の形態から9世紀前半と考えられる。

S I 03は完掘することができた。長方形の住居跡であるが、遺存状態がやや悪く、時期を決定できる遺物がない。重複関係からS I 08・09より新しい。

S I 04は完掘することができた。正方形の住居跡であるが、遺存状態がやや悪く、出土遺物も少ない。坏の形態からして10世紀前半と考えられる。

S I 06は1／3が調査区外にあるため完掘することができなかつた。方形を呈する住居跡と考えられる。今回検出された住居跡の中では比較的遺存状態が良く、遺物も比較的多い。坏や皿の形態・技法等から9世紀後半と考えられる。

S I 07は2／5が調査区外にあるため完掘することができなかつた。方形を呈する住居跡と考えられる。遺存状態がやや悪く、出土遺物も少ない。坏の形態からして9世紀前半と考えられる。

S I 08は重複が著しいが、長方形を呈する住居跡と考えられる。遺存状態がやや悪く、時期を決定できる遺物がない。重複関係からS I 03より古く、S I 10より新しい。

S I 09は重複が著しいが、方形を呈する住居跡と考えられる。遺存状態がやや悪く、出土遺物も少ない。坏の形態からして9世紀前半と考えられる。

S I 10は東側3／5が調査区外にあるため完掘することができなかつた。方形を呈する住居跡と考えられる。遺存状態が極めて悪く、時期を決定できる遺物がない。重複関係からS I 08・09より古い。

以上のことから、これら9軒の住居跡はおおよそ次のような時期に分けられる。

8世紀前半 S I 01 (S I 10)

8世紀後半 (S I 08)

9世紀前半 S I 02・07・09

9世紀後半 S I 06 (S I 03)

10世紀前半 S I 04

今回の調査では、調査面積が限られているため、集落の構成・展開については十分明らかにできなかつた。しかし、今回の調査区の南東側部分、以前の調査区の南西側部分で住居跡の重複が著しいことから、集落の主体は今回の調査区と以前の調査区の中間部分で、住居跡の密度はかなり高いこと、そしてその時期は8世紀前半から10世紀前半にかけてであることが明らかとなつた。

3. 中世以降

住居跡以外の遺構については、出土遺物も少なく時期の特定に困難が伴うが、遺物や覆土の状況等から、すべて中世の所産と考えられる。遺構外からは近世の遺物も出土しているが、中世のものと比較して小破片であり、量も少なく、主体的なものではない。

検出された25基の土坑のうち、壁面・底面に粘土の貼られたもの7基、貼られていないもの18基であった。粘土の貼られていない土坑は、規模に多少差があるが、いずれも人為的に埋め

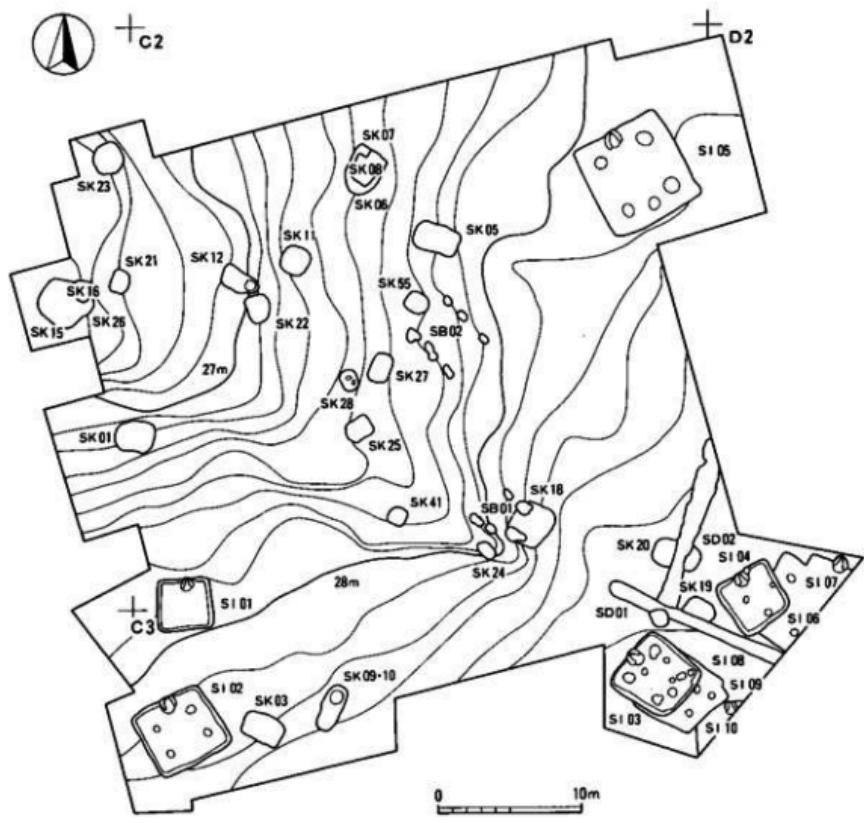
戻された堆積状況を示しており、墓坑と考えられる。また粘土の貼られた土坑も同様に人為的な堆積状況を示しており、粘土を貼ることの意味はともかくとして、やはり墓坑と考えられる。したがって本遺跡周辺は出土遺物から、15世紀前半には墓域として利用されていたものと考えられる。

近年、土坑のみならず井戸や地下式坑等から馬骨や馬齒が出土する例が増えている。出土した遺構の性格や馬骨（歯）の出土状況そして出土した部位等によって、その持つ意味が異なるのは当然である。本遺跡のSK24の例は、遺存状態はやや悪いものの上顎と下顎の臼歯がそろっており、頸骨の一部と考えられる骨片も検出されている。ただし切歯は検出されていない。その出土状況からして臼歯が頸骨に完植した状態のまま、土坑がある程度埋まった段階で、何らかの（祭祀？的な）目的で遺棄されたものと思われる。

もちろんSK24の時期が近世にまで下る可能性も考慮しなければならない。そうした場合には本遺跡周辺が近世における佐倉七牧の一つである内野牧の範囲に含まれていることから、牧との関係も問題となろう。

参考文献

- 新井和之他1985『成田市松崎白子、大袋台畠・塔之下遺跡発掘調査報告書』成田市松崎・大袋遺跡調査会
- 折原洋一他1986『千葉県成田市宗吾西鷺山遺跡発掘調査報告書』成田市教育委員会・宗吾西鷺山遺跡調査会
- 桜井秀雄1992『井戸から出土する牛馬遺存体について－動物犠牲との関係－』『考古学研究』39-2
- 史館同人1983『房総における奈良・平安時代の土器』シンポジウム資料
- 千葉県教育委員会1985『千葉県埋蔵文化財分布地図（1）－東葛飾・印旛地区－』
- 土肥孝1983『日本古代における犠牲馬』『文化財論叢－奈良國立文化財研究所創立30周年記念論文集－』
- 成田市教育委員会・成田市埋蔵文化財分布調査団1974『成田市文化財分布調査報告書－埋蔵文化財編－』
- 成田市教育委員会社会教育課1994『遺跡ガイド』
- 成田市史編さん委員会1980『成田市史 原始古代編』
- 萩原恭一1993『下総町不光寺遺跡』財団法人千葉県文化財センター
- 林田利之1992『千葉県成田市駒井野荒追遺跡』財団法人印旛郡市文化財センター
- 房総歴史考古学研究会1987『房総における歴史時代土器の研究』



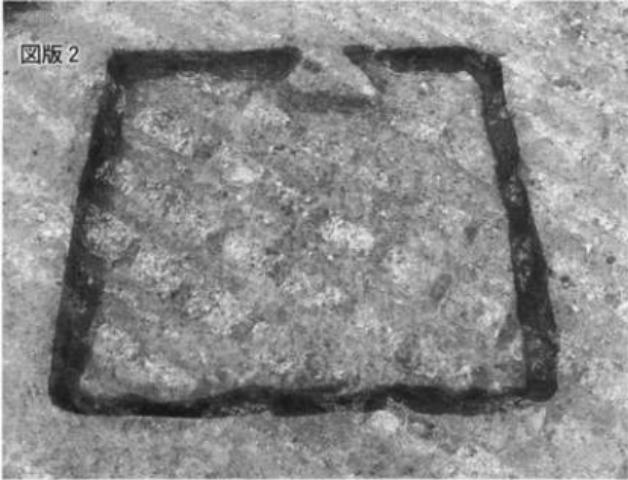
第26図 遺構配置図

写 真 図 版

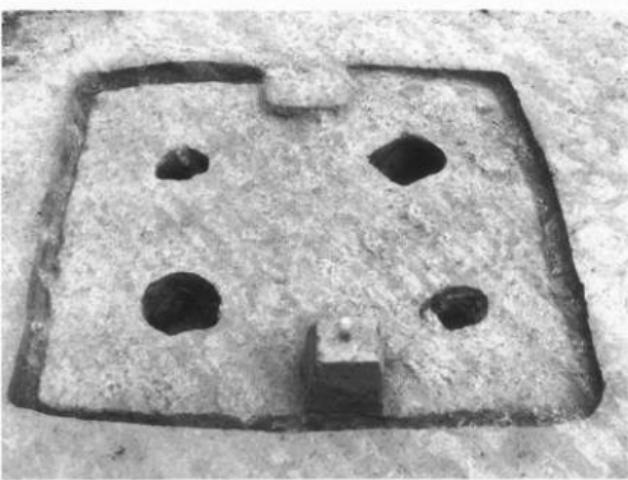
太袋塔之下遺跡

遺跡周辺航空写真

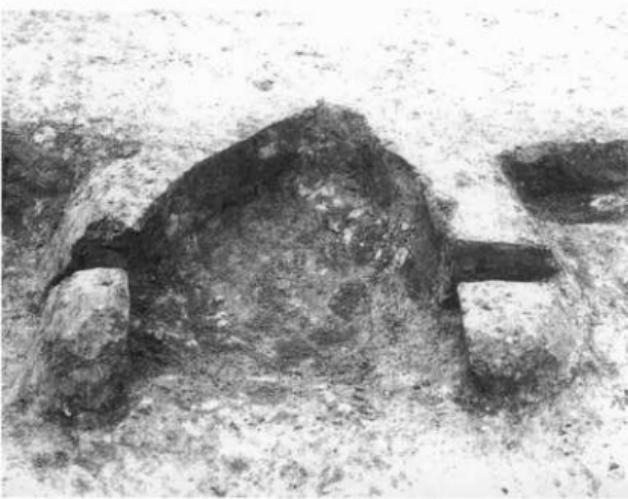
図版2



SI01全景



SI02全景



SI02カマド



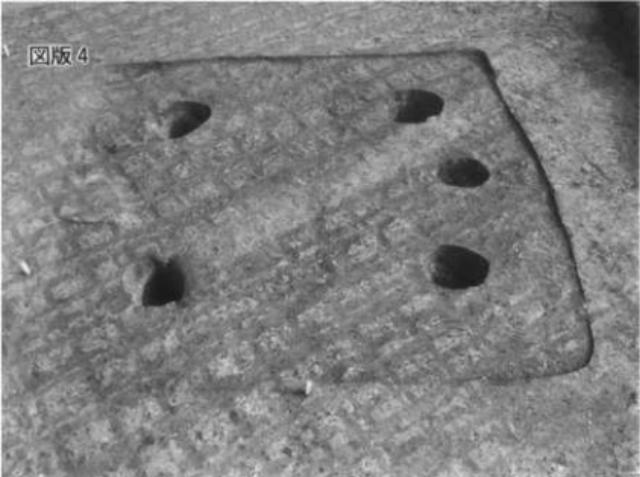
SI03全景



SI03カマド



SI04全景



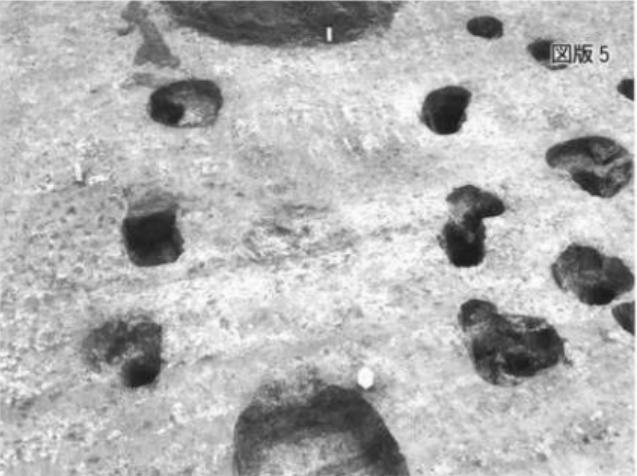
SI05全景



SI03・08・09・10全景



SI04・06・07全景



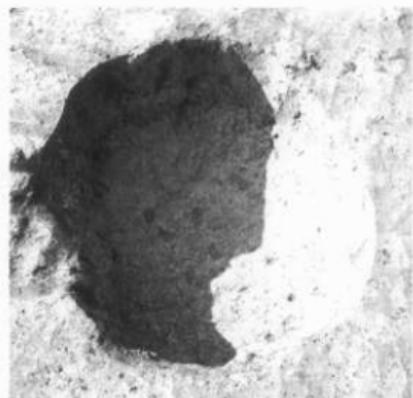
SB02全景



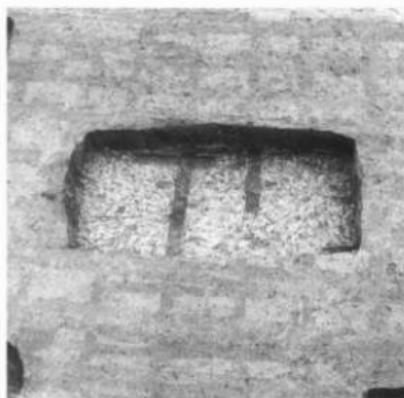
SD01全景



SD02全景



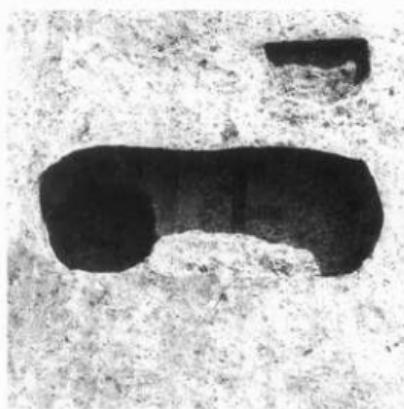
SK01全景



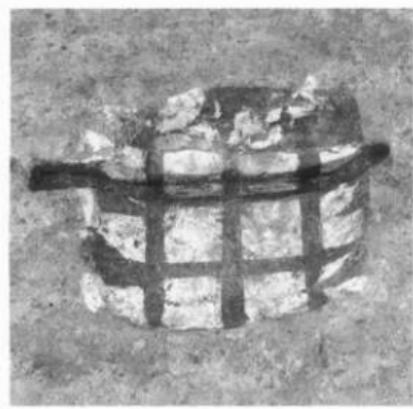
SK03全景



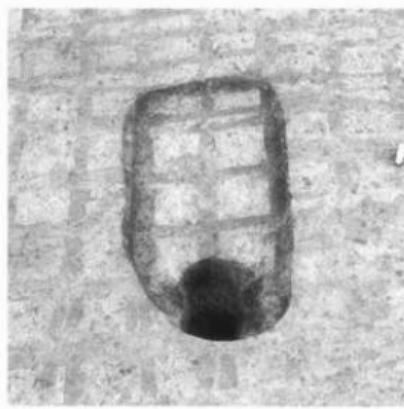
SK04 • 05全景



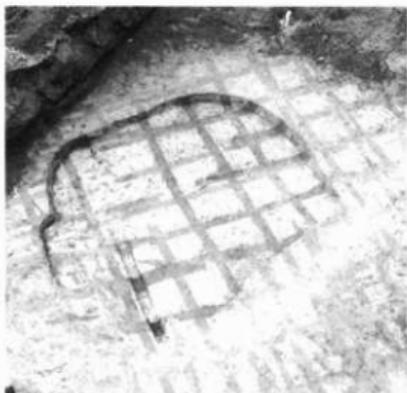
SK09 • 10全景



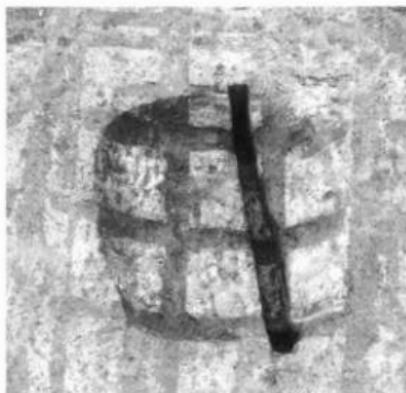
SK11全景



SK12全景



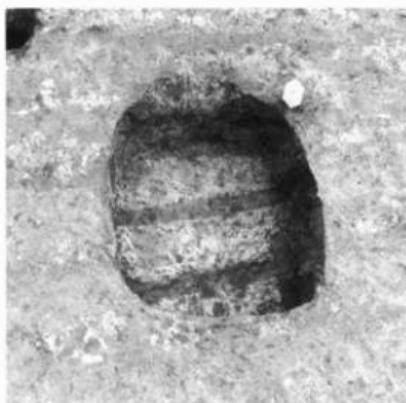
SK15・16全景



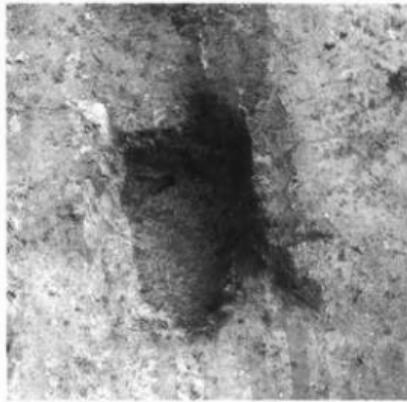
SK21全景



SK23全景



SK26全景



SK24全景



SK24馬齒出土狀況



SI01-1



SI01-2



SI01-1



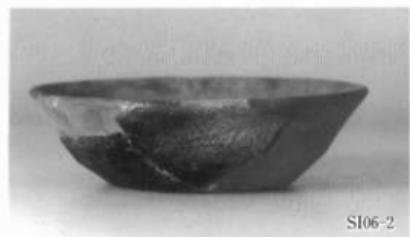
SI06-4



SI06-1



SI06-4

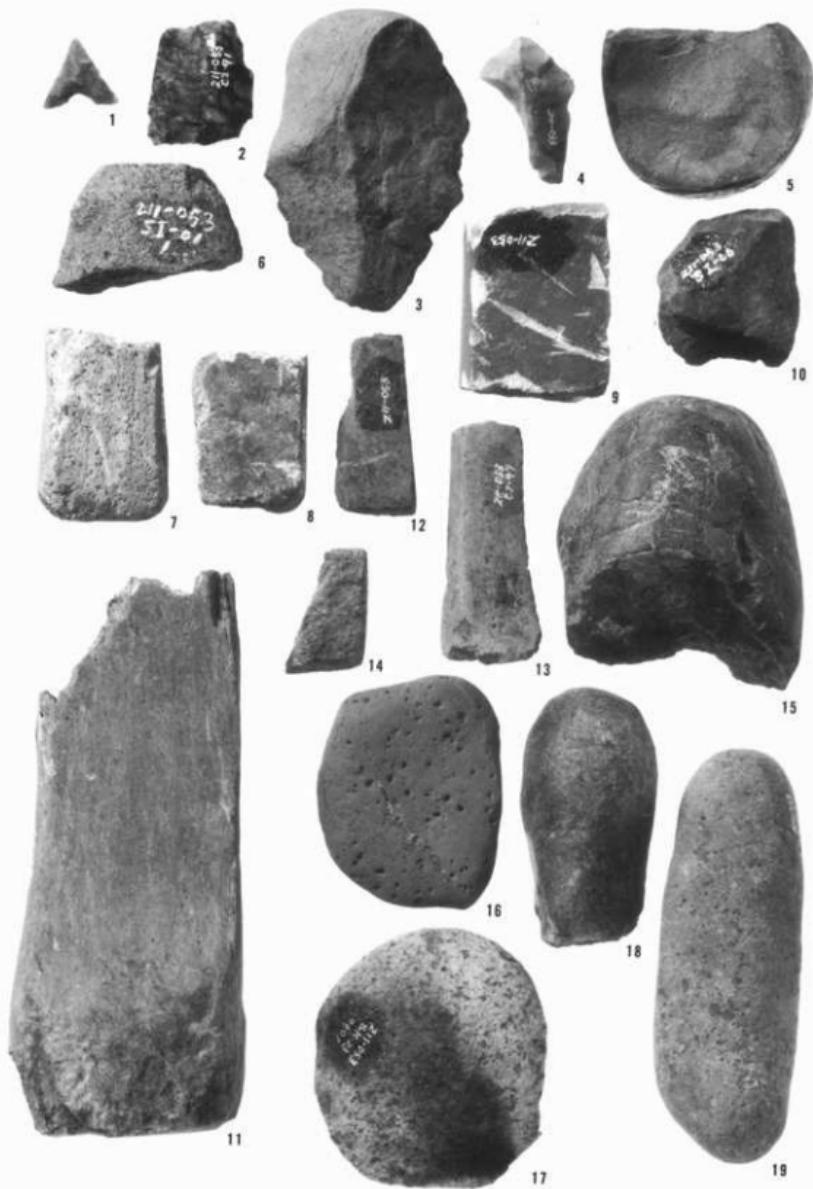


SI06-2



SD02-1

遺構内出土土器



出土石器

報告書抄録

ふりがな	なりたしおおぶくろとうのしたいせき							
書名	成田市大袋塔之下遺跡							
副書名	TV中継放送局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第263集							
編著者名	小久賀隆史・新田浩三							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809番地2				TEL 043-422-8811			
発行年月日	西暦 1995年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
大袋塔之下	千葉県成田市大袋塔之下	12211 053	35度 45分 50秒	140度 17分 20秒	1990.11.01 ~ 1990.12.26	2,000	TV中継放送 局建設に伴う 事前調査	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
大袋塔之下	集落跡	绳文		绳文土器・石器・楔形石器・石斧	土師器壊に墨書き 土坑内から馬齒			
		弥生		弥生土器				
		古墳	住居跡 1軒	土師器				
		奈良・平安	住居跡 9軒	土師器・須恵器・鉄鎌・土玉・磁石				
		中・近世	獨立柱建物跡 2棟 溝 1条 櫛列 1列 土坑 25基	陶磁器・煙管・磨石・敲石				

千葉県文化財センター調査報告第263集

成田市大袋塔之下遺跡

—TV中継放送局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成7年3月24日 印刷

平成7年3月31日 発行

発 行 新 東 京 国 際 空 港 公 団
東京都中央区日本橋本町2丁目7番1号

編 集 財團法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地2号

印 刷 株式会社 み つ わ
千葉市美浜区新港213-5
